

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月6日現在

機関番号：24302

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720163

研究課題名（和文）『羅葡日辞書』を中心としたキリシタン辞書編纂の研究

研究課題名（英文）A study of the lexicography of the early Catholic missionaries in Japan: With a focus on the Latin-Portuguese-Japanese dictionary, *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum*

研究代表者

岸本 恵実 (KISHIMOTO EMI)

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：50324877

研究成果の概要（和文）：

『羅葡日辞書』には典拠注記や多様な日本語訳など、原典のラテン語辞書カレピヌスに必ずしも基づかない箇所が多く、ラテン語学習・日本語学習両方に配慮した独自の方針がとられたことがわかる。

『羅葡日辞書』が後続の『日葡辞書』の編纂に利用された明らかな証拠は見つかっていないが、文語が基調の『羅葡日辞書』の日本語訳において、『日葡辞書』と類似した口語的な語彙・語法も散見される。訳出上のゆれも見られることから、今後『日葡辞書』と合わせた日本語研究への活用が期待される。

研究成果の概要（英文）：

*Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum*, the Latin-Portuguese-Japanese dictionary published by the Jesuits in Japan in 1595 is based on unique and original principles. These principles are not necessarily based on the original European dictionary, *Calepinus*. For example, *Dictionarium* contains different kinds of notes on Latin sources and variety of Japanese translations, which were meant for both learners of Latin and Japanese in Japan.

No clear evidence has been found of the use of the *Dictionarium* in editing *Vocabulario da lingua de Iapam*, the Japanese-Portuguese dictionary which was subsequently published. However, some colloquial words and idioms similar to those used in *Vocabulario* can be found in the Japanese translation of *Dictionarium*, which is basically written in a literary style; moreover, the translation contains some inconsistencies. Thus, it is hoped that *Dictionarium*, along with *Vocabulario*, will be utilized more widely in the future as an important source in Japanese language studies.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、日本語学

キーワード：キリシタン、辞書

## 1. 研究開始当初の背景

(1) キリシタン辞書相互の関係には不明な点が多かったこと

今日キリシタン資料と呼ばれる、16-17世紀カトリック・ミッションが日本布教のために作成した資料のうち、印刷された辞書として現存するのはイエズス会による『羅葡日辞書』(1595年天草刊)・『落葉集』(1598年刊)・『日葡辞書』(1603-1604年長崎刊)、そしてドミニコ会のディエゴ・コリャードによる『羅西日辞書』(1632年ローマ刊)である。それぞれ個別の辞書の研究は進められてきたが、編纂にあたり先行の辞書がどのように利用されたかについて実態はまだ明らかにされていない。

(2) 『羅葡日辞書』をめぐる近年の研究の進展

### ① 原典との対照研究

研究代表者は、『羅葡日』の典拠となったラテン語辞書カレピヌスの版を1570年リヨン版の系統とほぼ確定し、原典からの改変の特徴や翻訳の方法について明らかにしつつあった。原典カレピヌスは16世紀当時ヨーロッパで広く普及し影響も大きかった辞書であるが、ヨーロッパ辞書学の中で研究が進んでいるとはいえなかった。

### ② バレト『葡羅辞書』研究の進展

研究代表者は、従来ほとんど言及・研究されてこなかった日本イエズス会士マノエル・バレト編纂・自筆の写本『葡羅辞書』(1606-1607年成立)を再発見した。『葡羅辞書』は、『羅葡日』のほかヨーロッパで印刷されたジェロニモ・カルドゾの『葡羅辞書』(1569年初版)など他の多くの資料を使って編纂されたことが明記されており、『日葡辞書』も典拠の一つになっているなど、日本イエズス会内の辞書編纂を実態を知る上で極めて重要な資料である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、キリシタン版『羅葡日辞書』を、原典であるラテン語辞書カレピヌスおよび日本イエズス会が編纂・出版した辞書として後続の『日葡辞書』と対照させることにより、キリシタンの辞書編纂の実態を明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

(1) 『羅葡日辞書』と原典カレピヌスとの対照を行い、日本における改変の実態を精査す

るだけでなく、『羅葡日』全体での編纂・翻訳方針のゆれを探る。

(2) 『羅葡日辞書』と『日葡辞書』との対照①②を行い、編纂上の関係を探る。

① 『羅葡日』のポルトガル語・日本語対訳と、『日葡』の日本語・ポルトガル語対訳がどの程度一致しているか見る。

② 『羅葡日』『日葡』の日本語の共通点・相違点を見出す。

## 4. 研究成果

(1) (2) (3)に研究の主な成果、(4)に成果の国内外における位置づけ、(5)に今後の展望を記す。

(1) カレピヌスから『羅葡日辞書』への改変  
従来明らかになっていた点に加えて、本研究により以下の成果があった。

① 『羅葡日』ではカレピヌスのラテン文引用の大半は省略され、作家名もほぼ省略されているが、記載がある場合も多く名前が見えるのはプラウトゥス、ヴェルギリウスらであり、キケローを模範とし多数引用しているカレピヌスとは傾向が一致しない。『羅葡日』には、古語であることなどやや特殊なラテン語に注記する意図があったと考えられる。

② 日本語訳の中で並置される類義語や例文の多くは、原典に対応させた訳ではなく、独自に付加されたものである。

(2) 『羅葡日辞書』日本語訳のゆれ

日本語の訳出方針が必ずしも一貫していないことは従来指摘があったが、さらに以下のような訳語や語法のゆれも確認された。

① 「南蛮」はA部ではEurope、I・M部ではIndiaの対訳に用いられている。

② 形容動詞の連体形に-naruでなく省略形の-naをとる例が少なくとも70例はあり、出現箇所には偏りは見られない。

(3) 『羅葡日辞書』と『日葡辞書』

① 『日葡辞書』編纂における『羅葡日辞書』の利用

いずれも日本イエズス会による辞書であり、両方に関係した者がいた可能性も十分考えられることから、『日葡』編纂において『羅葡日』が利用された可能性は高いものの、今

のところ明らかな証拠は見つかっていない。むしろ、ポルトガル語と日本語の対訳に違いが目立ち（「南蛮」「脾の臓」など）、『羅葡日』にのみ見えて『日葡』に掲載されていない日本語も複数ある（「ふくい」「べんざい」など）。

## ②『羅葡日辞書』の日本語の特徴

『羅葡日』は日本人のラテン語学習とヨーロッパ人の日本語学習を目的としているが、ラテン語は見出しでの変化形の明示・アルファベット順の徹底など初級者への配慮が見える一方、日本語訳では活用を示さずに類義語を並べるなど中上級者向けとなっている。『日葡』の方は、日本語の活用を明示し用例や注記も多く、『羅葡日』に比べ日本語学習向けに特化した辞書となっている。このような基本的性格の違いから、『羅葡日』は『日葡』に比べ、明らかに口語よりも文語の要素が強い。しかし用例数は少ないものの、(2)②のような文語的とはいえない新しい語法や、九州方言と思われる語が混在しており、口語的要素も全体を通じて散見される。

## (4) 成果の国内外における位置づけ

『羅葡日辞書』はその成り立ちから、ヨーロッパ・日本および日本以外の宣教地における辞書史を横につなぐ資料として重要であるが、現段階では、現代語のコーパス研究が盛んなヨーロッパ辞書学・アジア辞書学や、キリシタン資料が依然周辺的な研究対象とみなされがちな日本語学の各界においてよりも、カトリックミッションによる現地語研究の成果の一つとして、新進の領域「宣教に伴う言語学」において『日葡辞書』と合わせ最も注目を集めているといえよう。ただ、この若い領域の手法や方向性はまだ研究者ごとの差が大きく、同時代の辞書、特に宣教に伴って生まれた辞書の中での『羅葡日』『日葡』の位置づけは今後の課題となっている。

また本研究遂行の途中、本研究と極めて関係の深い原田裕司氏『キリシタン版『羅葡日辞書』の原典「カレピヌス」ラテン語辞典の系譜』（2011年10月、非売品）が刊行された。本書は全て原田氏による成果であるが、本研究を大いに補い今後『羅葡日』研究をさらに推し進める契機になるものとして、特筆すべき業績である。本書にて原田氏は、研究代表者が未確認であった以下の二点、『羅葡日』の原典が1570年リヨン版系統のカレピヌスのうち1580年または1581年リヨン版であろうこと、『羅葡日』編纂にあたりカレピヌスだけでなくジェロニモ・カルドージの羅葡辞書が使用されたこと、を指摘している。刊行後、カレピヌスを中心とするラテン語文献について原田氏と意見交換を行う機会を得（〔学会発表〕①においてなど）、『羅葡日』をめぐる様々な研究課題を明確にすること

が出来た。

## (5) 今後の展望

### ①『羅葡日』の日本語の基礎調査

カレピヌスに基づく翻訳方法は明らかになってきたが、ローマ字の綴り方、訳語の選択、訳文の語法・文体など、『日葡』と比べて日本語全体の調査は立ち遅れている。冊子体の索引（金沢大学法文学部国文学研究室編（1967-1973）『ラホ日辞典の日本語』ラホ日辞典索引刊行会）や先行研究に加えてデータベース（<http://joao-roiz.jp/LGR/>）にて全文が公開された現在、あらためて基礎的な調査を行う必要がある。

### ②辞書同士の関係の解明

本研究では『羅葡日』とラテン語辞書カレピヌス・『日葡』との関係を調査したが、ごく一部にとどまり、全体像はまだ明らかではない。今後、特に同じ日本イエズス会の資料であり、上記三辞書の利用が明記されたバレット『葡羅辞書』を含め、さらに編纂上の利用関係について調査を進めたい。また原田氏の指摘したカルドージの辞書もバレットが『葡羅辞書』編纂にあたり頻用したものであり、『羅葡日』・バレット辞書など日本での利用の実態が注目される。

### ③辞書以外のキリシタン資料との関係の解明

ラテン語・日本語稿本が残るペドロ・ゴメスの『講義要綱』（1593年完成、1595年和訳）やバレットが編んだラテン語詞華集『フロスクリ』（1610年長崎刊）などの辞書以外のキリシタン資料と、『羅葡日』との関係解明はまだほとんど手付かずといつてよい。カレピヌスから『羅葡日』編纂の流れや日本イエズス会の蔵書利用のありようが見えてきた今、『羅葡日』と他の資料とは、単なる比較にとどまらず編纂上の具体的・直接的な関係を探る段階に来ている。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

① Kishimoto Emi, “Dialects included in *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595)”, *ASIALEX 2011 Proceedings*, 査読無, 2011, 274-283

② Kishimoto Emi, “Annotations in *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595) in the Context of Latin Education by the Jesuits in Japan”,

*Proceedings of the XIV EURALEX International Congress*, 査読有, CD-ROM, 2010, 1020-1025

③Kishimoto Emi, “*Dictionary Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595) as a Learners’ Dictionary”, *ASIALEX 2009*, 査読有, CD-ROM, 2009, (ページ数なし)

[学会発表] (計 1 1 件)

①岸本恵実、「ラポ日辞書日本語訳にみられる口語的要素」、2011年度第2回「宣教に伴う言語学(第二期)」研究会、2012年3月16日、東京外国語大学本郷サテライト(東京都)

②Kishimoto Emi, “Colloquial Japanese Expressions in the *Dictionary Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595)”, 7th International Conference on Missionary Linguistics, 2012年3月1日, University of Bremen (ドイツ)

③Kishimoto Emi, “Dialects Included in *Dictionary Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595)”, *ASIALEX 2011*, 2011年8月22日, 京都テルサ(京都市)

④岸本恵実、「原典との対照によるキリシタン版『羅葡日辞書』日本語研究の試み」、語彙・辞書研究会第39回研究発表会、2011年6月11日、新宿NSビル(東京都)

⑤岸本恵実、「羅葡日辞書の日本語訳の解明に向けて」、2011年度第1回「宣教に伴う言語学(第二期)」研究会、2011年5月31日、東京外国語大学本郷サテライト(東京都)

⑥岸本恵実、「キリシタン資料における「南蛮」「天竺」のゆれと変化—『羅葡日辞書』『日葡辞書』を中心に—」、宣教に伴う言語学(第二期)研究会、2010年10月3日、東京外国語大学本郷サテライト(東京都)

⑦Kishimoto Emi, “Annotations in *Dictionary Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595) in the Context of Latin Education by the Jesuits in Japan”, XIV EURALEX International Congress, 2010年7月8日, WTC, Leeuwarden (オランダ)

⑧Kishimoto Emi, “Comparison among Dictionaries Written by the Jesuits in Japan: *Dictionary Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595) and *Vocabulario da lingua de Iapam* (1603-1604)”, 6th International Conference on Missionary

Linguistics, 2010年3月18日, 東京外国語大学(東京都)

⑨岸本恵実、「『羅葡日辞書』『日葡辞書』を用いた語史研究の試み」、キリシタン学研究会、2010年2月13日、聖心女子大学(東京都)

⑩岸本恵実、「『羅葡日辞書』日本語訳のゆれ—「南蛮」をめぐって—」、キリシタン学研究会、2009年12月26日、聖心女子大学(東京都)

⑪Kishimoto Emi, “*Dictionary Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595) as a Learners’ Dictionary”, *ASIALEX 2009*, 2009年8月20日, The Imperial Queen’s Park Hotel (タイ・バンコク)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岸本 恵実 (KISHIMOTO EMI)

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：50324877

### (2) 研究分担者 無し

### (3) 連携研究者 無し